

日本海海戦を
転機とした男たち

3

島村速雄

司令長官から信頼された裏方

「やっぱり島村（速雄）には敵わぬ。東郷さんの信用が違ふ。俺が何を言っても駄目だが、島村君が言ううと、そうだとする。」日露戦争時の第二艦隊参謀長・藤井較一が、部下の佐藤鉄太郎に語ったひとことです。

明治三十七年（一九〇四）、連合艦隊は、ロシアのバルチック艦隊が五月十四日にベトナム沖を発ったとの情報入手します。敵艦隊の目的地はウラジオストック。しかし、考えられる航路は三つありました。南シナ海から対馬海峡を通るルート、太平洋を北上し津軽海峡を通るルート、そして太平洋から宗谷海峡を通るルートです。

十九日、ルソン海峡でバルチック艦隊の臨検を受けた三井物産の船より、ロシア士官が「対馬海峡に向かう」と発言したとの情報を得ます。対馬にいた連合艦隊は、ロシア側が嘘の情報を流して陽動作戦を狙っているとして、津軽海峡が本命ではないかと転移を考えました。

旗艦三笠にて行なわれた会議で、藤井較一のみ対馬に

留まるべきと主張するも、

島村速雄
(国立国会図書館蔵)

他の幹部は津軽海峡への転移を強調します。議論が津軽に傾きかけたとき、遅れて三笠に

到着したのが、第二艦隊司令官・島村速雄でした。

東郷平八郎司令長官から意見を求められた島村は、バルチック艦隊が欧州から航海を続けている状況なら、最短コース

を選ぶはずと推測。津軽への転移について「自分は聊か時機尚早と思ふ」と述べ、東郷は大多数の意見を退け、対馬に残ることを決断。その策は見事に功を奏し、連合艦隊は対馬沖でバルチック艦隊の撃滅に成功するのです。

日露戦争開戦当初、島村は連合艦隊参謀長でしたが、初年の戦果が芳しくなく、同期の加藤友三郎を参謀長に推し、第二艦隊司令官に転出となります。作戦立案から外れた島村ですが、裏方にまわりつつも、蓄積された海戦のノウハウは日本海海戦でも大いに活かされました。近年では、日本海海戦で敵の進行方向に合わせて同航戦に挑んだ戦法も、島村の案だったとされています。

戦後、参謀の秋山真之が賞賛されるなか、島村は静かに、若手の活躍を称えました。東郷は、そんな島村だからこそ、最も信頼していたのかもしれない。会議の後には藤井がふと部下に漏らした「敵わぬ」という言葉が、二人の絆を物語っているのではないのでしょうか。

日本海海戦で旗艦として戦った戦艦「三笠」は、大正15年（1926）に記念艦となり、現在の位置に固定されました。

「三笠」入口で「本誌を見た」と言われた方は入艦料を100円値引きします（一般のみ）。

員数	区分	一般	シニア	高校生
1名		600円	500円	300円
20名以上		500円	500円	200円

入艦料

観覧時間

4月～9月	3月・10月	11月～2月
9:00～17:30	9:00～17:00	9:00～16:30



船の上の
歴史ミュージアム



世界三大記念艦

三笠

〒238-0003 神奈川県横浜須賀野市稲岡町 82-19

●京浜急行「横須賀中央駅」から徒歩15分 ●JR「横須賀駅」から三笠循環バスで「三笠公園」下車
TEL.046-822-5225 <https://www.kinenkan-mikasa.or.jp/>

